「エルサレムのために嘆く」　2023年08月24日

イエスは言われた。「行って、あの狐に、『私は今日も明日も三日目も、悪霊を追い出し、癒やしを行うことをやめない』と伝えよ。ともかく、私は、今日も明日も、その次の日も進んで行かねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で撃ち殺す者よ、めんどりが雛を羽の下に集めるように、私はお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。」（ルカ13：32～34）

主イエスが歩いていると、ファリサイ派の人々が近寄って来て、「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています」と忠告した。領主ヘロデの主イエス殺害の企みをファリサイ派の人々が教えたというのは、彼らは主イエスに好意を持っていたからなのか、それとも、主イエスにここに居てもらいたくない何らかの理由があったのであろうか。ヘロデの主イエス殺害の企てを聞いて、主イエスは、「行って、あの狐に、『私は今日も明日も三日目も、悪霊を追い出し、癒やしを行うことをやめない』と伝えよ」と答えられた。ヘロデは、主イエスが病人を癒やし、悪霊を追放していることを聞いて、「『耳に入って来るこの噂の主は、一体、何者だろう。』そして、イエスを見てみたいと思った（ルカ9：9b）」と書かれている。主イエスに深い関心を寄せているが、主イエスはヘロデを、「あの狐」と呼んでいる。雅歌2章15節bに「ぶどう畑を荒らす小さなジャッカルを」とある。ジャッカルは狐に似た動物である。主イエスは、ヘロデをぶどう園（ユダヤ）を荒らすジャッカル（狐）、略奪者と見なしていた。主イエスは「ヘロデには、悪霊を追い出し、病を癒やす業を止めないと伝えよ」と言い、今日、明日、その次の日、三日目に全てを終えるまで、ヘロデの殺害から逃れ、神の計画に従ってエルサレムへの道を進み行く。そして、「預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めんどりが雛を羽の下に集めるように、私はお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった」と言われた。神殿と最高法院があるエルサレムは宗教、政治、経済、文化など全ての権力が集約されたユダヤの首都である。このエルサレムで、代々の預言者たちは殺され、神がユダヤの民に遣わされた人々は石で打ち殺されて来た。主イエスは、過去の預言者たちへの仕打ちを、今、主イエスに向けられていると明言している。神は都エルサレムを愛し、めんどりが雛を羽の下に集めるように守って来た。詩編36編8節では「神よ、あなたの慈しみはなんと貴いことでしょう。人の子らはあなたの翼の陰に逃れます」と歌っている。ところが、人々は神の守りに感謝せず、応じようとはしなかった。だから、「見よ、お前たちの家は見捨てられる。」ルカ福音書が書かれた時は、エルサレムはローマによって、既に崩壊させられていた。

「言っておくが」と傾聴を促し、「お前たちは『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言う時が来るまで、決して私を見ることはない」と言われた。「主の名によって来られる方に、祝福があるように」という言葉は、主イエスのエルサレム入城の時に、民衆が主イエスに向かって叫んだ言葉である。ここでは、主イエスが再臨された時、エルサレムは悔い改めてキリストを認め、主イエスにまみえる喜びの日が来ると言っておられる。しかし、その日までは、「私を見ることはない」と暗黒の中に捨て置かれるエルサレムの不信仰を嘆かれた言葉であろう。